

# 前橋市消防局自主研究グループによる水難事故予防教育活動

大手貴史・石原宏二・長塩典久・中澤里沙子・粒見 大・田中 拓・中澤修平（前橋市消防局）  
丸岡隆典（前橋市防災危機管理課）、 笹川由美（前橋市役所市民部）

## 1. はじめに

前橋市における水難事故予防教育活動は、平成 22 年（2010 年）に管内を流れる利根川で近隣の小学校 5 年生男児が流された水難死亡事故がきっかけとなっている。事故後、前橋市内にて指導員（プール）養成講習会が開催され、前橋市内の学校へも水難事故への対処法を広めていくことの重要性が認識され、前橋消防局内に水難事故予防教育に関する自主研究グループを立ち上げ、市内の小中学校や地区の中核となる市民サービスセンター（公民館）への訪問指導や水難予防啓蒙資料作り等を行っている。令和 4 年度は、市内小中学校での背浮きによる「ういてまで教室」を実施する中で、本学会が現在取り組み始めた水防災対策プログラム「シンういてまで」を参考にライフジャケットを使用したプログラムを取り入れた。また、地区公民館との連携事業として、地域住民を対象に、水難事故予防に特化した新たな防災教育の取り組みを行ったので、今回紹介する。

## 2. 市内小学校に向けた指導者用参考資料配付

筆者らの自主研究グループは、令和 3 年度は学校へのういてまで教室での実技指導の他に、児童生徒を対象とした「ういてまで教室」の映像資料を作成し、市内の全小中学校への配付した（令和 3 年度水難学会研究発表会にて報告）。なお、映像資料配付後のアンケート調査では、教師対象の「ういてまで」指導の参考資料作成の要望が多かったため、令和 4 年度は、前橋市教委の保健体育担当指導主事の助言をいただきながら、教師が活用し易い内容の精選をしながら教師向けの「ういてまで」資料を作成した。また、多忙を極める教師の皆さんが、タイミング良くタブレット端末でも資料閲覧可能となるために、従来の DVD 資料ではなく、PDF 等の資料を 7 月上旬にオンライン配信した。

## 3. 「ういてまで教室」におけるライフジャケットプログラム

令和 4 年度の市内小中学校での「ういてまで教室」には、自主研究グループで購入したライフジャケットを使用し、ライフジャケットプログラムをカリキュラムの一部に組み入れた。授業は、背浮きを中心とした「ういてまで教室」をベースに、ライフジャケットによる「セルフディフェンス」に費やす時間を確保した。授業の中でのライフジャケットの活用時間はわずかであったが、ライフジャケットの安全性と浮き身の有効性は、体感した児童だけでなく、背浮きとの対比として授業を観察する教師側でも十分に理解できたものと思慮される。今回の取り組みには、ライフジャケットの調達や授業の組立て等の課題もあるが、資器材の借用や到達目標等を明確にすることで、水難事故予防のさらなる普及啓発に繋がるものと確信している。

## 4. 市民サービスセンター（地区公民館）との連携事業

当グループには、前橋市消防局職員以外に、前橋市役所の防災危機管理課や市民サービスセンター職員にも加入いただいている。これは地域防災へのアプローチに糸口を見つけるためにこちらからお誘いして実現したものであるが、今年度は本格的に、市民サービスセンターとの連携事業として、3 回のういてまで教室を実施した。基本的な実施内容は、講義と実技を組み合わせた 2 時間程度内容として、実技は消防署で保有している簡易水槽（幅 2m×深さ 1 m）を現地に持ち込んで実施した。今年度は、夏休み中の 7・8 月のサマーチェンレジ事業として 2 回、9 月中の防災月間中に 1 回実施した。そのうち 8 月の実施回については、自治会連合会や女性防火クラブにも後援していただき、資器材の購入や準備、安全管理などについてご協力いただくことができた。また、近隣小学校にも全面的に協力していただき、校長先生参加の下で夏休み中のプール開放をしていただき、地域の児童だけでなく、保護者、自治会長、各団体の方々と、まさしく地域ぐるみで水難事故予防について共学できたことは非常に大きな収穫であった。

## 5. 今後の展望

今後も、学校教育現場での「ういてまで教室」を継続しながら、学校教育現場で教員が主体的にライフジャケットプログラムに取り組めるための指導参考資料づくりに傾注したいと考えている。また、今年度新たに普及の活路を切り開いた地区市民サービスセンターでの普及活動を通して、市民の水辺安全教育に少しでも役に立てるよう、あらゆる機会を捉えて、普及啓発活動を行っていきたい。